

第1部会

1. セッション I で討議された内容(活動の展開)

開会祈祷	林田 秀彦
司会	林田 秀彦
記録	北原 樹理

前回記録朗読(10月5日キリスト教教育部会)

- Q. 大学宗教センターと内容を話し合うことが必要と話していたはずだが。
 A. 昨年度決定した内容については、将来的に目指しているが、現段階即座に統一するのは困難である。そこで、具体的なことから段階的に取り組んでいくことにした。そこで、まず始めに、駒込キャンパスの連絡協議会を2002年1月21日(月)第1回として行うことになった。

キリスト教教育部会発表の内容に対して

- ・「聖学院ボランタリーセクター」については、NPOとの関連で、今後も検討していく。
- ・かつては聖書科の教員の会が行われていた。実質的な活動や運動をしていかないと、献身者や受洗者などをまとめているだけでは、足りないのではないか。
- ・学校で育つ部分と教会で育つ部分は違う。我々は学校で育つ部分を考えていった方がよい。
- ・キリスト教部会がある意味は、現、各学校が閉鎖的である中で、交流を深めるという意味で、聖学院にとって大切である。
- ・聖学院中学・高等学校の点火祭に学生を連れて参加した。駒込キャンパスにも同じ仲間がいることを知り、学生も喜びを感じていた様子。
- ・キリスト教センターのしっかりとした組織ができないので、心配であったが、将来の目標を目指して取り組んでいきたい。
- ・この部会でいろいろな計画があるが、まず、各学校のクリスマスのイベントが記載されたポスターができた。
- ・昨年に続き、各校・園の「一目でわかるキリスト教教育活動」を配布。

2. セッション II で討議された内容(活動の具体的項目)

本日の発表内容についての討議

- Q. キリスト教センターを設立するには、まず、キリスト教連絡協議会を設立するが、これは、広報活動と同じ気がする。
 A. 聖学院のキリスト教活動は、各学校で行われていたが、それを一貫して、聖学院のキリスト教教育はこういうものだ打ち出すことが必要である。
 Q. 固定した目的ではなく、長期的な目的の上に設立した方が良いのではないか。
 A. 理念は、長い射程距離の中において、見ていかなければならない。
 昨年から話し合う中で、聖学院の中にどういう学生像を見ているか・見ていく

か、話し合った。

聖学院キリスト教教育の中で、日本のプロテスタント教会に仕え、働き人としての育成を目指していく。

今後の駒込キリスト教協議会の内容

- ・ 音楽関係も入れたい。
- ・ 日程を共通に空けられることが、可能かどうか。その中で、キリスト教活動のより深い交わりが可能かどうか。各学校のことをほとんど知らないのが現状。何処まで一体化できるか。

教会との懇談会について

- ・ 今までのように、各学校で行っていると、時期が重なったり、内容も同じようなことをしていることがあるので、3年周期で3年に1回各学校が交代で受け持つのはどうか。教会に対して、キリスト教教育を行っていくと宣言する意味でも、毎年実践することが大切。
- ・ 教会には、聖書のお話に興味を持ち行くケースと、ハンコをもらう為に行くケースがある。このうち、義務で来ている生徒・学生をどう受けとめていけば良いか悩む。
- ・ これからの日本の伝道を考えた時、教会だけでは難しい。キリスト教学校の役割・責任は大きい。
- ・ 学校内の礼拝がどのようにすれば生き生きした場となりうるか、四苦八苦しているが、ミッションスクールとして今後、検討していかなければならない。
- ・ 実際に各学校の礼拝に参加しなければ、評価・判断ができない。各校の教師による交換講壇など考えてみては。
- ・ 義務でも、この時代、教会へ来てくれるだけでもありがたい。
- ・ 学校と教会との懇談会で、どれだけ教会へ送り出すのに苦労しているかを教会側に伝える。
- ・ 本当の福音を語っていれば、生徒・学生も来るはず。来ないのは牧師の責任でないか。
- ・ 学生は口から本物を語っているかどうか、観ている。それに応えられているか。
- ・ 魂を託す牧師がいないのではないか。

3. 今後の課題、継続討議について

- ・ キリスト教教育部会として、キリスト教にしぼったものを扱う広報。
- ・ 聖書科のための教科書作り。

(報告者：北原 樹理)